

[中・高校生の部 アナウンス部門]

- ③ 佐賀県出身の原泰久さんは日本を代表するマンガ家です。中国の歴史をテーマとした「キングダム」で手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞しました。原さんがマンガ家になりたいと思ったのは大学生の時でしたが不安定な職業を選ぶ勇気がなく一般企業に就職しました。しかし企業で活躍し自信をつけた原さんはもう一度夢を追いかけるために会社を辞める決意をしました。それから3年間マンガを書き続け誕生したのが「キングダム」です。原さんは「やりたいことを追いかけてきたから毎日が楽しい。みんなも好きなことを見つけて思い切り打ちこんでほしい」と語ってくれました。原さんの生き方はあきらめずに夢に挑戦する勇気を与えてくれます。
- ④ 有田焼で有名な有田町・岳地区には「日本の棚田百選」にも選ばれた「岳の棚田」があります。しかしこののどかな田園風景は農業に携わる人たちの高齢化や後継者不足により維持することが次第に難しくなっています。そこでこの美しい風景を少しでも知ってもらおうと昨年度から「棚田Tシャツアート展」が始まりました。ホームページで原画を募集してオリジナルのTシャツを制作し完成したものを棚田に飾るのです。自然素材で作られた何百枚ものTシャツが青空のもとひらひらと揺れている風景は壮観です。懐かしい光景と粋なアートとの融合が新たな人と人とのつながりを生み出しているようです。
- ⑥ 10月31日佐賀市で「サガ・ライトファンタジー」の点灯式が行われました。この催しは佐賀駅から県庁まで続く中央大通りの街路樹を約180万球の電球で飾りつけるというもので夜になると通りは華やかに照らされます。中心商店街の活性化を目指して始まったこの催しも今年で28年目を迎え訪れる人々の目を楽しませています。近年ではLED電球の青色など鮮やかな色合いも増えて美しく幻想的な雰囲気を楽しむことができます。また一般市民が手作りで参加する「光のオブジェコンテスト」などのイベントも加わり家族で楽しむことができるものになっています。澄んだ夜空のもとキラキラと輝く光の道をあなたも歩いてみませんか。

[中・高校生の部 朗読部門]

- ② 杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」「もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急に厳な顔になって、じっと杜子春を見つめました。「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶てしまおうと思っていたのだ。——お前はもう仙人になりたいという望も持っていない。大金持になることは、元より愛想がつかない筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです」杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が響っていました。「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇わないから」鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、「おお、幸、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。

『杜子春』 芥川龍之介 作 青空文庫 P8

- ⑤ いま伝えなければならない、という思いに突き動かされ、荒木は口を開いた。「なぜ、新しい辞書の名を『大渡海』にしようとしているか、わかるか」馬締は、つまみのピーナッツをリスみたいに一粒ずつかじっているところだった。佐々木が指先で軽く円卓を叩き、注意をうながす。それでようやく、話しかけられているのは自分だと気づいたらしい。馬締はあせった様子で首を振った。「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」魂の根幹を吐露する思いで、荒木は告げた。「ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小さな光を集める。もつともふさわしい言葉で、正確に、思いをだれかに届けるために。もし辞書がなかったら、俺たちは茫漠とした大海原をまえにたたずむほかないだろう」「海を渡るにふさわしい舟を編む」松本先生が静かに言った。「その思いをこめて、荒木君とわたしとで名づけました」きみに託す。声にはしなかった言葉を聞き取ったのか、馬締は円卓から両手を下ろし、姿勢を正した。

『舟を編む』三浦しおん 作 光文社文庫 P34～p35